



# へら鮎

Monthly fishing magazine herabuna Contents

「へら鮎」の題字/叶 九隻

No.473  
May.2005

# 5

さらに12増えました!  
野釣り場も加わりました!

**管理釣り場割引クーポン券**

野田幸手園 椎の木湖 清遊湖 谷和原大沼  
 隼人大池 上尾園 F.A吉羽園 谷養魚場  
 将監 柳生F.P 筑波白水湖 泉壘 逆井HC  
 友部湖崎湖 水藻FC 甲南へらの池  
 三和新池 狭山HC 新座LC 川越FC  
 府中HC 当麻池 多賀釣池 芦田湖水光園  
 鳥羽井沼 朝日池 大上へら池 田島池  
 霧の沼 清川つくしF.C 小川つり堀園  
 三名湖・舟宿 光月 千代田湖・舟宿 千和  
 西湖・釣舟 白根 西湖・釣り館 丸美  
 西湖・釣り館 青木ヶ原 165ページ～

アングラー・オブ・ザ・イヤー

## 9 特集Ⅰ 日研AOY、登場。

## 19 特集Ⅱ もっと「ライン」を知りたい。

●今月の表紙●  
angler: 橋本幸一  
field: 清遊湖  
photo: 本誌・里  
layout: 本誌・里

### COLOR (カラー)

- 26 名手・石井旭舟がいく、へら鮎出会い旅… へらぶな浪漫街道  
《第二十八回》横根根川
- 34 **新連載** 小池忠教 激釣大全  
《第三回》両タンゴ
- 44 杉山達也のSPLASH BEATⅢ  
《Vol.12》日曜日の野田幸手園!!
- 51 棚網 久 あなたの夢を叶えます。  
「ミスターG、私をウドン職人にしてください!」  
ドリーマー:高橋わたるさん 釣り場:羽生吉沼
- ★AREA REPORT  
58,66 小貝川吉野(茨城県) 本誌・伊藤洋一  
60,68 邑知淵(石川県) 山本一朗  
61,69 戸田川(愛知県) 後藤 誠  
62,70 白川ダム(奈良県) 前田誠志  
63,71 横武クリーク公園(佐賀県) 河口正伸
- 134 竹とともに生きる。  
《第22回》古老竹 米田 勝
- 137 戸張 誠 野釣り道場  
《第十二回》【豊英湖・宙釣り】
- 142 チョーチン王・田中雅司の深由奥義伝承 魚心掌握  
Vol.8【苦りきった食い渋りから、競技会での戦略を学ぶ】さくら湖
- 147 田辺哲男の「それってどーゆーことよ!?」  
《Vol.28》魔王・関川康夫、筑波流源湖で大暴れ!  
【4ストローク・深宙バラグル】管理釣り場編!!
- 152 吉川ひとみの「へらってヤバイわっ!!」  
《Vol.34》ひとピー、手賀水系進出!!  
ついにコココテ野べら初ゲットなるか!?
- 156 稲毛師匠と編集部諸が行く、ODEKO危険度120%  
《第5回》滝川・新玉村ゴルフ場脇、烏川・柳瀬川下(群馬県)
- 193 本音で迫るへら用品インプレッション。へらアイテムメッタ斬り!  
【HeRaオモリ軸】 (旬)オーツ精工
- 194 岡田 清 Deep Side Angle  
《Vol.19》【ハイブリッドパターン】 嵯峨ら湖(千葉県)
- 201 北川穂積の全国野釣り行脚  
《第4回》四番川(岡山県)
- 204 釣りの帰りに寄りたいお店  
《file.9》南部手賀沼近く【南部亭】の生姜焼定食
- 206 釣果予想クイズ
- 208 フィッシングレディ  
《今月のレディ》佐藤美代子さん 清遊湖(千葉県)

### STAFF

●Producer  
根本百合子

●Editor in chief  
田中里史

●Editor  
大場勝良  
諸富一秋  
伊藤小百合  
伊藤洋一

●Planner  
〈オフィス・えぶ〉  
藤原 肇

### MONOCHROME (モノクロ)

- 72 平成16年度 相模湖大型表彰式
- 76 へら鮎釣り 超基本講座  
《第5回》ボート釣りの超基本 舟付け編
- 83 あらいしのぶのなぜなぜしのちゃん  
《第5回》「しのちゃん、休日の管理釣り場でなぜなぜ」野田幸手園
- 88 NHCSピリット  
《Vol.19》JBへらぶなトーナメント in 清遊湖 福田幸男
- 92 トーナメント小林恭之が挑む! 竿頭までぶっ飛ばせ!!  
《Vol.17》柳生F.P「月例会入賞者大会」
- 99 江成公隆のトーナメント、復活への道。  
《Vol.35》底釣りゼミ2005 PART3 on Mac
- 106 そんなモジリにダメされて… 天野正由  
《その17》巨べら求めて三十三里(相模川～亀山湖)
- 112 水辺のプラネタリウム 吉本亜土  
《今月の星空》「西木村・紙風船」
- 115 どやさー 今月の釣り場 西田清明  
《その5》若竹池の段差の底釣り
- 118 最狂へら戦士養成所“鮎の穴” 漢タカハシ  
《第二十七話》【高級キャビアで悪が栄える!? チョウザメ釣りにビューイコー!!】
- 122 **新連載** 母なる湖… 琵琶湖べらを釣れ! 南元彦  
《第1回》【春にはちと早い? 西の湖に巨べらの夢を見る】
- 126 野田幸手園新聞
- 162 ワクワク管理釣り場情報
- 171 小売店情報
- ★へら鮎BOX  
177 里ちゃんの最新編集長雑記  
178 情報発信基地  
180 ボイス  
186 コラム『へら狂おやじと呼ばないで』 白石和弘  
187 コラム『日研だより』 日研広報部長・遠藤亮己  
188 **新連載** コラム『日々是、勉強!』 ホワイト  
189 コラム『紀州“想いの竹”のものがたり』 中峯伸行  
190 プレゼント発表  
191 広告索引  
192 編集後記



この物語は、  
栄光、そして挫折を味わい、  
今、再び這い上がろうとする一人の男の人間ドラマである。

# 江成公隆の トーナメント、 復活への道。

text and photo by Kimitaka Enari and Satoshi Tanaka  
業界初、Web運動企画！～のハズが更新停業中！ (URL) <http://hesar.yokohamatsurumi.net>

## 「一歩進んで二歩下がる!?!」

〈Vol.35〉

# 底釣りゼミ2005

PART 3

on Mac

「トーナメント復活への道。」、最大の危機である。

連載が始まってはや35回、約3年。もともと、「釣りが出来ないなりの復活」がテーマではあるのだが、ここ最近の江成は、さまざまな事情で、これまでで最高に釣りに行けなくなっている。釣りに行けない、ということももちろん承知の上の連載だけど、それでも、江成本人は強烈な「罪悪感」に苛まれてしまっているようだ。今月号の「休載申し込み発言」のくだりも、そんな江成の「苦悩」の表れなのかもしれない。

「釣りの記事じゃないじゃないか！」というみなさんのご意見はごもっとも。それを承知の上でお願いしたい。

みなさん、江成を応援してあげて欲しい…。

ここを乗り越えなければ、「復活」はありえない。いや、この苦しさを乗り越える過程こそ、「トーナメント、復活への道。」なのである。里は連載開始時、江成と「とことん付き合うから」と約束した。だから、もしもアナタが今の江成の記事にイライラしているとしたら、それは全て僕の責任である。

それでは、「底釣りゼミ2005」をどうぞ…。

by 里ちん

いよいよ里ちんからの宿題にとりかかることにしよう。

まずは「ペレ底ブーム」について。

この釣りが「ペレ底」と呼ばれるようになってから、僕は全く経験がない。「ペレ宙」から派生して「ペレ底」というネーミングなのだと思うが、「ペレット」を用いた底釣りは大昔から存在していた。実は「ペレ底」という名前になる前から僕にはあまり経験がないのだが、その爆発的な効果は、釣り堀をホームとする者なら誰でも知っていた\*。

ゴールデンクラブ時代、その効果をまざまざと見せつけてくれたのは、本誌でも活躍していた富永勲氏である。

僕がゴールデンに入会した時点では、長らく続いていたらしい「底釣り縛り」の月例会はすでに無くなっており、手返しの速さからほとんどの先輩達は規定ギリギリの浅いタナで勝負していた。もちろん富永氏もカッツケのスペシャルistだったが、たまたま底釣りを選択する事があった。そんな時、氏が多用したメソッドが、今で言う「ペレ底」である。僕の月例会初優勝の最初のチャンスを打ち砕いたのは、氏の底釣りであった。

カッツケへの興味が高まると、僕は底釣りへの関心が高まっていったことは以前に書いた。怖いもの知らずだった僕は、無謀にも月例会で底釣りを選択するようになる。ある月例会、富永氏が底釣りで快調に飛ばしているのを見た僕は、イマイチだったカッツケから底釣りへスイッチした。そして撃沈。この時はじめて僕は、氏のエサがペレット主体であることを知った。当時の僕の底釣りの技術的な面への理解度は別にしても、ウキの動きがまるで違うことに「エサの違い」が大



きく関与していることは明白だと感じた。  
2004年12月号、秋ちゃん(秋野孝之氏)の特集を見てみよう。18ページにタックルからエサまで丁寧に書かれている。これらの全てに共通するのは「しっかりと」という点だが、エサの項を引用しておこう。

「スイミー系の底釣りエサでは、強いアオリに重さ不足となる。また、へらはペレットに反応しているの、よけいな混ぜ物は釣りを難しくするだけだし、寄せる必要もない。(以下略)」

彼はペレットの重さについて言及しているので、セッティング面での考察\*ということになるのだが、続きの「へらはペレットに反応」という一文が、理詰めでの考察の無意味さを示している。

今度は同じ12月号での岡田君のコメントを見てみよう。186ページの文章を引用する。

「今年のジャパンカップなんかでもそう。ペレグルでやっていて、もっと早いアタリを出してやろうと『夏冬マッハ』にすると、まるで反応しない。重さで考えれば、軽い方がより反応しそうなのにね。魚達が明らかにペレットを意識している証拠。(以下略)」

アオリに重さ不足どころではなく、反応さえなかったという彼の告白。どうやら理屈ではないという認識が、多くの名手の中にすでに存在するようだ。

2005年2月号に、トドメの一文がある。田辺氏の「それって〜」にゲストとして呼ばれた秋ちゃんと、ホストの田辺氏との会話だ\*。

「毎口エサとしてペレットの顆粒を食べているんです。だから、基本的に魚が好きなエサなんですよ。」

「食べ慣れているから、ハリに付いていても思わすバクッってことね。重さとかそういうことより、へらの本能的な好みに訴えた釣りである」と。

この後、両ウドンに似た固形チックな釣りだという話になっていく\*\*\*が、とりあえずここでは取り上げずに先へ進む。

「だからペレシ底といっても、何か特別な技を使っている訳ではないんです。魅力的なエサによる、きわめてベーシックな底釣りですよ。」

もちろんペレシを付けて放り込んだだけでは釣れない。ベーシックな底釣りの理解と実践が必要である。しかし、「ペレシ」のパワーは理詰めでは説明出来ない。へらの習慣や嗜好の問題だからだ。ここで、「魚釣りは、生き物を相手にする遊び」だと再認識することが出来る。管理釣り場であっても、「自然」を相手にすることには変わりない。人の考えなど遠く及ばない領域……頭で釣りたい僕にはお手上げである。実は里ちゃんからの宿題「ペレシ底について」は、僕的には正直言って「原稿にしろくらくら、つまらないテーマ」であり、「書いへんことなんかないよ」と初めに里ちゃんに告げていた。今まで「ペレシ底」をあまりやっつてこなかったのには、限られた釣行回数の中では「ペレシ底」を選択するチャンスがなかったこともあるが、「あまり興味がない」のが一番の理由だった。

ところで、へら鮒はフランクトンフィーターである。フランクトンには動物性と植物性があるが、へらが食べるのは主に植物性だと僕は教わってきた。練りエサは「疑似フランクトンなのだ」とも。越冬前にはミミズや赤ムシも食べるらしいとどこかで読んだ気もするが、生きたままではないとはいえず、魚粉であるペレシを好んで食べるとはいったい

どういう事なのだろう。本能よりも人為的に授けられた習慣（刷り込み？）が優先されるのだろうか。だとしたら、「自然」も人の手でコントロール可能という事になってくる。考えてみれば、へら鮒はもともと人の手によって改良された人工品種である。「お手上げ」の僕にも光が見えたか？ いや、養魚の段階からへらに付き合える釣りはそうはいない。それに、やはり自然を完全にコントロール出来てもつまらないと思う。「お手上げ」の領域があるからこそ、誰でも「ないパスル」を勝手に想像出来、幾通りもの勝手な方程式を導き出す楽しみがあるのではないか……。

「自然を完全にコントロール」は、心配せずとも有り得ない。もし、コントロールラブルだと感じている人がいるとしたら、それはただの思い上がり過ぎない。自然は人の想像を遥かに超えた動きをする。全く予測がつかない。たとえへら鮒が人工的に作り出された品種だとしても、フィールドに解き放たれた瞬間から人の手の届かない存在となるのだ。ゴカイやモエビ、それにミノーやワームでもへらを釣ったことがある僕にとっては、空想の楽しみを失う心配は全く無い。

\*2005年2月号の記事（\*\*参照）の中で、「ペレシの重さが浅い池での底釣りに有効」という萩ちゃんのコメントがある。僕のゴールデン時代の記憶でも、大型狙いではなくとも有効なメソッドのひとつとして、釣り堀では認知されていたと思う。もしかすると気になる読者がいるかもしれない部分は、浅い池でペレシトが有効なシチュエーションとして紹介されている「宙だと渋くて底だと釣れる

んだけど、普通のエサではいまいちウワズっちゃう……みたいな」という部分。最近では、ウワズってアタリが飛ぶような底釣りは「ない釣り」であるという認識が一般的になりつつあると思うので、このケースは「ムリ底」に近い。「底釣り」底（付近）にいるへら、底（付近）で食いたいへらを狙う釣り」ならば、選択自体が間違っているのではないのか？ しかし宙も渋いならやむを得ないのか……。僕は以前から、この問題を「水深の浅さ」と理解してきた。浅い水深ゆえに、「へらの層が分かれていない」と。

\*\*この記事自体、2004年12月号の続編というか補完する目的で書かれている。里ちゃんが編集長になって以降、記事の連続性にはかなり気を配っているようだ。関連記事での編集部の見解にも統一性が感じられ、真剣に記事を作っているのが分かる。

\*\*僕はこれについては大筋で賛成というか、言いたいことは分かるのだが、実はものすごく難しい表現だと感じた。取材

現場でのニユアンスを伝えたい筆者（里ちゃん）の気持ちは、僕にはじゅうぶん伝わって来た。が、余分な粒子をあまり散らさない点が「チック」なのか、マブシにペレシを多用する点が両ウドン（固形）「チック」なのか、はたまた両方なのかイマイチ曖昧であるし（おそらく両方だろう。「半生」という言葉でニユアンスは十分伝わってきた、マブシを付ける以上そもそも固形と固形チックの境界も曖昧である。さらに言えば、読者側に、里ちゃんや萩ちゃん、それに田辺氏のイメージする「両ウドンの効果」と同じイメージがあるかも疑問である。この記事は「ペレシ」がテーマであり、ページ数の都合上、「両ウドン釣りの概略」を掲載するのは不可能だったに違いないが、記事を書いた当時の里ちゃんにそこまでの意識があったかどうか？ 「両ウドン」については、「へら鮒」ではまだほとんど取り上げていない未知の世界ではなかったか？

僕も自分で書いた記事を読み返し、大いに反省しているところだが、「書いていない部分を汲んでもらった結果、誤解される」よりは、「「チャ」チャと書いてあるが、読んでも良く分からない」方がマシであると感じた。小説ではなくマニユアルなのだから、受け取り手によって解釈に違いがあつては困るのだ。もちろん取捨選択の自由はある。しかしそれは、100%理解出来てからの判断でありたい。

※書き終えてから、「そんなに気にするほどの事か？」と感じて来ている。原稿から削除しようかどうかどうしようか迷ったが、字数が足りなくなるのでそのまま放置することにした……。

# 長ハリスの完全底釣り。

里ちゃんからの二つめの宿題は「長ハリスの底釣りについて」だったが、現在流行の釣り方に対し、僕がノウハウを持っている筈が無い。当然、僕は断った。すると里ちゃんは、そのかわりに、彼自身が感じている「なぜ長いハリスを用いた完全底釣りは決まりにくいのか」という疑問を解き明かして欲しいと言ってきたのだ。読者の何割が里ちゃんと同じように感じているのだろうか。僕にはあまりピンとこなかった。

長いハリスを用いた完全底釣りは「決まりにくい」らしいが、「まったく決まらない」といえば、そんなこともない。それは里ちゃんも隣で嫌というほど見せつけられて知っているのだ。ただ、彼自身で決めたことは一度も無く、成功例もあまり見ないことから「決まりにくい」という結論に至ったのだと推測出来る。が、もしこれが通常のセッティングを基準にしたまま故の錯覚としたら、3月号ですでに答えは出ている。色々書いてあるが、102ページの図Aだけでも十分。つまり、長いハリスを用いた場合は「少しズラしたくらいでは角度が変わらない」のだ。そのため「いつもの」感覚でズラしては、期待通りの効果が得られないどころか、逆に迷いが生じてしまうだろう。

近年は水深がたっぷりある釣り場が多い。そういう釣り場で底釣りをする場合、いっぱい底がとれる竿を選ぶ釣り人が多い。楽ちんだからだ。だがこれが盲点。図Aのような理解が頭になくとも、先入観抜きで「ものは試し」と、大きくズラしてみる余裕がすでに道系に残されていないのだ。僕の想像では、「戦略的に」底釣りに長いハリスを用いるのではなく、「測ってみたら底が取れなかった」た

めにやむを得ずハリスを延ばしている人も多い気がする。また、前者の「戦略的」な選択であったとしても、「振り込みづらい」ためにわざわざ道系を詰めている人もいるのではない。僕は仕掛けを詰めることには何の疑問も無い。ただ、犠牲になる部分があるという理解があった上での選択をすべきだと思うのだ。

11月3日の筑波湖での取材結果をようやく記事にする。

1月号に書いたとおり、小柳康秀氏と里ちゃんは長ハリス。僕は普通の長さのハリスで底釣り。速攻狙いは小柳氏だけで、僕と里ちゃんは完全底釣りを目指した。が、当日の筑波湖の状況はイマイチで、長いハリスを用いても早いアタリは出なかった。そうそうこちららも思うようにはいかない。

僕と小柳氏が底釣りを止めるまで三人の釣果にそれほど差はなかったが、実はウキの動きには大きな差があった。里ちゃんのウキだけよく動いたのだ。エサも僕とほとんど同じで、釣り方も同じ完全底釣りだったが、ナジみ切ったからの反応がまるで違う（ちなみに同じ長ハリスの小柳氏はそこまで待っていない）。結果として釣果に結びついていないので、「ハリスが長いことによる、ただのイトズレだ」とか「無駄」と言われればそれまでだが、釣り人が里ちゃんではなかったら、釣果に結びつけられたかもしれないのだ。無視していいデーターではない。落ち込み狙いでもないのに長ハリスで完全底釣りを打つメリットがあるということになるからだ。

引用しまくって申し訳ないが、2004年12月号の岡田君の記事にこういう文章がある。

「長いハリスで上からエサを追わせて、というふうにも捉えられがちなんだけど、俺の中のイメージでは全く違う。確かに、ポロポロとは上から追ってくるのもいるんだらうけど、

俺がイメージするのは、ゆっくりと落ちてきたエサに対し、地べたのへらが「下から反応する」という感覚。」

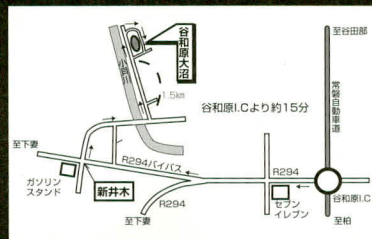
岡田君にとって不本意ながら、早いアタリではなく結果的に完全底釣りになろうとも、「ゆっくりと落ちてきたエサに対し、地べたのへらが「下から反応する」効果は共通のもの」と認識している筈だ。「ゆっくり」は、高い位置から落下することから発生する。言うまでもないが、高い位置とはハリスが延びたことにより支点（オモリ）が上方向へ移動した位置である。半径（ハリス）が延びればストロークも長く広範になり、時間もそれだけかかることになる。

おそらく、岡田君が感覚的に感じているということは、それが事実がどうかは水中の中を見てみないことには100%断言は出来ないけれども、「長ハリスの完全底釣りも十分にアリ」と言えるのではないだろうか。それから、岡田君の「ポロポロとは上から追ってくるのもいるんだらうけど」という、一見、自信なげな発言は、実は、岡田君が「魚は生き物。完璧はありえない」ときちんと認識している証拠なのである。実は、徹頭徹尾ガチガチの理論派より、こういう、戦略・理論はきちんとした上で、「遊び」の部分をちゃんと残している釣り人は、「強い」。それは、岡田君の実績が証明しているだろう。

大小、様々なへらがぎっしり！ カツケから底釣りまで、思う存分腕を磨いてください！！

アたる！ 釣れる！

# 谷和原大沼



- 入場料 1日2000円 半日1500円  
女性・中学生以下 1500円
- 営業時間  
4～9月 平日 6:00～16:30  
土日祝日 5:30～16:00  
10～3月 平日 6:30～16:00  
土日祝日 6:30～15:30
- 規定 竿7～18尺 タナ・エサ自由  
(生きエサ・一本バリ禁止)

〒300-2400 茨城県筑波郡谷和原村根新田228  
☎0297-52-2763

大型新べらの強引を味わいに、ぜひお越しください！！

両ウドン。

僕はあまり経験がないので偉そうなことは書けないが、さきほど「両ウドン」という言葉が出てきたので少しだけ書きたいことがある。それは、メディアで全く取り上げられていないとは言わないが、他の釣りに比べて異常に記事が少ない気がするということなのだ。僕の気のせいだろうか？ へら人口に占める「両ウドン」愛好者の比率で見れば、確かにマイナーな釣り方と言えるのかもしれない。しかし近年のビッグトーナメントでは、宙底問わず上位を独占することも珍しくない釣り方である。しかもトロコンのように暖季限定（マニアはオールシーズンだが）ということもなく、オールシーズン可能な釣り方なのだ。

少々古い話だが、2003年12月号にジャパンカップ（以下、JC）の特集がある。それは釣り方ではなく人間模様を主軸に据えて展開されていく里ちゃん熱筆のドキュメンタリーであったが、決勝に進んだ3人全員が両ウドンの「宙」釣りだったことは、ハッキリと書かれている。が、優勝者（秋ちゃん）の釣り方を詳細に取り上げてはいない。その後も写を改めて取り上げられることはなかった。

一年経過した2004年12月号。JCの特集は、トーナメントレポートと優勝者（秋ちゃん連覇！）の釣り方の二本立て。この差はいったい何なのか…。たまたま当時の秋ちゃんと話がかなかかっただけなのか？ ならば何故、レギュラーである岡田君の口から語らせなかったのか？ 彼は両ウドンの底釣りで2002年JCを制し、2003年は同じく両ウドンの宙釣りで準優勝である。何か意図があるのか？ どこからかの圧力でもあるのか？ 動くると言われても、動く

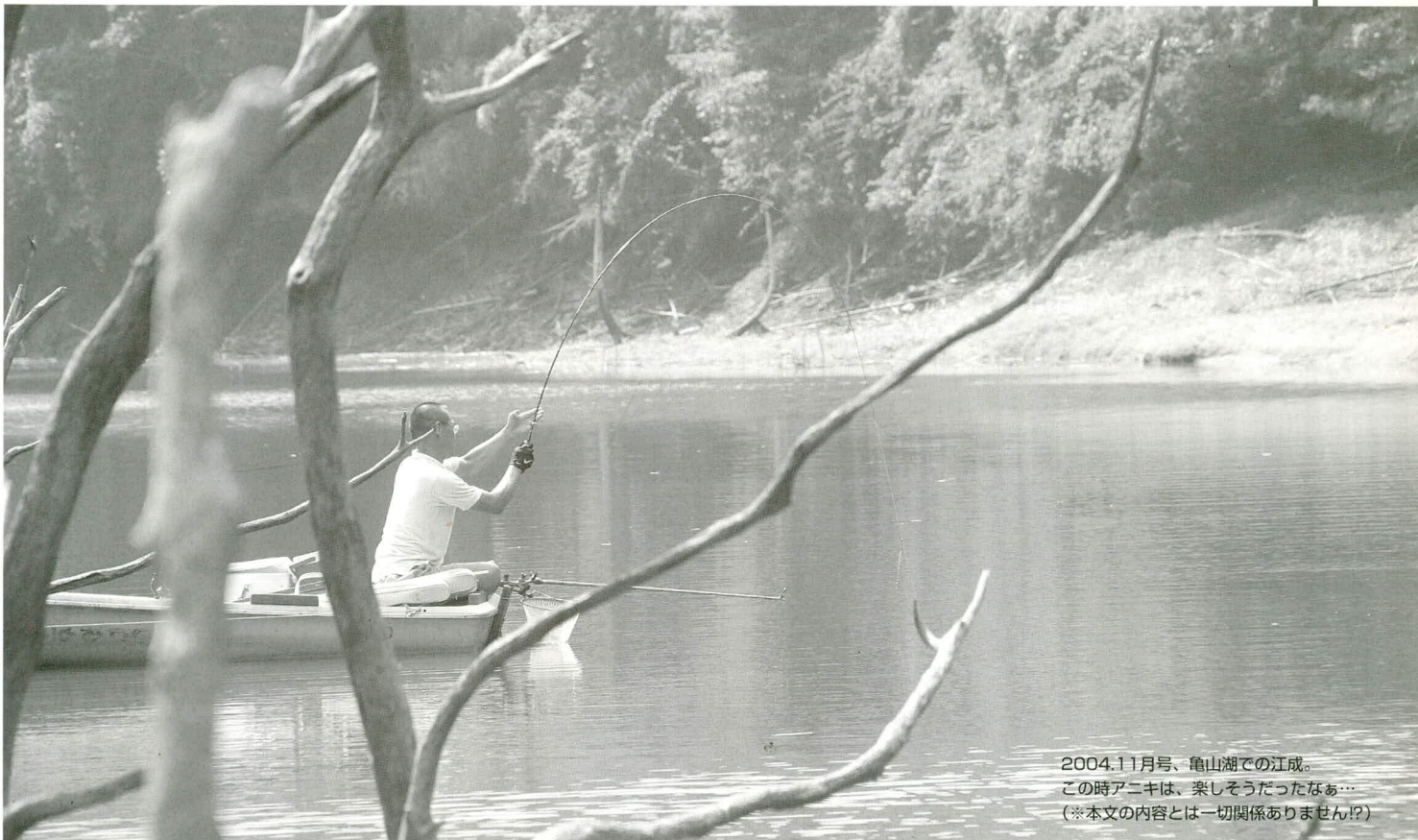
たくなってしまおうというものだ。両ウドンの底釣りの基本は「トントン」であり、一般的にはあまり大きくズラさないと言われている。

両ウドンの底をやったことがなくても、へら釣りを始めてある程度の年数が経っている方なら、そのくらいことは知っているだろう。ここで、両ウドンではない「普通の底釣り」と比較してみる。「トントン派」や「ズラシ派」というようにタナ設定に好みはあっても、「底釣りはズラシ幅が重要」ということはセオリーとして皆知っている筈で、「一般的にはあまり大きくズラさない」と言われる両ウドンとは明らかに違う。さらに、「普通の底釣り」での「トントン派」なら、おそらく「なるべく完全な落とし込み」を意識する人が大半だと思うが、両ウドンの底釣りでは「振り切り（タスキ）」が基本とされている。これらの違いはどこからくるのだろうか。考え方が根底から違う、全く別の釣りなのか？…そんな筈はない！ しかし、これらの違いを埋める説明を、即座に出来る者はそうはいないだろう。過去に読んだことがある両ウドンの底釣りの記事は、残念ながら「普通の底釣り」との繋がりを重要視せず、単独の世界として切り取っていたと僕は記憶している。それではダメなのだ。里ちゃんには早急に特集を組むよう、この場を借りて希望したい。

TO BE CONTINUED?

以上、新たな問題提起をさせて頂いたところで、底釣らせミ2005はおしまじ。

尻切れとんぼな感は否めないが、今のところ底釣りでは、北城 錦氏以外の新たな先生をお呼びする気には、どうしてもなれないのだ。そのためウドンの底釣りのスペシャリストは、とりあえず当僕の記事には登場しない。ご理解いただきたい。



2004.11月号、亀山湖での江成。  
この時アニキは、楽しそうだったなあ…  
（※本文の内容とは一切関係ありません!?)

春の人事異動。貼り出されたリストでは、僕らのチームは6名に戻っていた。しかし、チームの中に僕の名前はなかった。案の定、僕は異動である。また一からやり直しはかったるいが、サラリーマンにはついてまわる宿命というものだ。前号で書いた新人のようにゼロからというわけではないし、給料が下がるわけでもない。いや、むしろちよつとだけ上がるかもしれない。さらに、例の新人をかかえて先行きに不安を感じていた僕にとって、自らの意志ではなく責任放棄できたことにホッとしているという、いやらしい部分もある。少々心残りだが。

前職場での僕の業務は、3月13日の晩で終わった。

私物を片付けていると上司がやってきて、思わず僕は聞いてしまった。

「これって懲罰人事ですか？」

「なんで？」

「いや、労働時間では随分と御迷惑をおかけしたみたいなので。使いつらい社員は要らな

「お前さ、普通そういうことは聞かないんだぞー」

「ええ、サラリーマンには不向きなんでしょうね、私。ただ、次の職場でも早々に放り出されると思うので、もし何かの処罰としての異動なら、同じ間違いはしたくないと思いましたんで。教えていただけると助かります」

「特に深い意味はない。適材適所ということだ」

「アレ？ もしかして逆に御褒美でした？ もしかしたら給料上がるんですもんね？ いや、こりやすすいませんでしたあー」

「だから何度も言わせるな！ 深い意味はないんだぞー」

「じゃ、向こうへ行ってもマイペースでやりますますね」

「マイペース？ 頑張れよ？」

「ハア？ そりゃもちろん頑張りますよ。ただ、何かの処罰で「もう後がない」とかってんじやないんですかね？ ですから、「普通に」頑張りますよ。お世話になりましたっ！」

「……」

僕はバカだ。

辞令がおりる前、僕は真剣に転職を考えていた。もう、全てが嫌になっていたのだ。そういう意味では、今回の異動は全てをリセッ

ト出来る最高のタイミングと言えた。逆に、転職（商売）をするには最後のチャンスだったのかもしれない。しかし、僕は「ささやかな安定」重視に落ち着いた。この原稿を書いている際中、次男が誕生。僕の責任は一段と増した。

3月13日、上司が出ていったあと、僕は女子事務員の机の上に義理チョコのお返しを置いてしまった。その中身は、一度はあげてみたいと思っていた「パンティ」。笑いをとるか壁をかうか、今まではこわくて手が出せなかったが、もう顔を合わすこともない。僕は最高にいい気分の前職場を後にした。

職場での異動に次男の誕生。しばらく釣りは無理。今までも無理だったから、この先は考えられない。とりあえず里ちゃんにはしばらく「休載」を申し入れた。しかし、やはり却下。

「んなこと言っちゃってよあ……。次回は知らないぞあー」

さて、江成の「休載申し込み」を却下してはみたものの、来月号からの展開はどうしようか……。出来れば釣りに引つ張り出したいが、なかなかそうは簡単にいかない事情もある。はて、困った……。締め切り直前（実はこの原稿が最後の最後！）の思考回路ゼロの頭では、いい妙案が全く浮かばないのである……。

by 里ちゃん

# 釣番付

料金表

50名まで	55,000円
51名～75名	60,000円
76名～100名	65,000円
101名～125名	70,000円
126名～150名	75,000円
151名～175名	80,000円
176名～200名	85,000円

- ・仕上がりは黒一色です
- ・人数は成績表部分のみ数えます

書体見本

1. ぐりへの釣会
2. ぐりへの釣会
3. ぐりへら釣会

- ・番付をインターネットで公開できます（無料）

お問い合わせご注文はお早めに！

取扱店：柴舟 03-3613-2727

ウキや小物の銘入れに

## 転写シール

初回注文黒一色、300銘で8,500円～  
2回目以降同じものをご注文の場合は3,500円～

- ・8書体、8色を御用意しています
- ・角印も作れます

取扱店：

柴舟（東京都江戸川区）

03-3613-2727

佐伯釣具店（神奈川県川崎市）

044-911-3722

SANSUI川づり館（東京都渋谷区）

03-3499-5025

フィッシング中原（神奈川県川崎市）

044-711-8266

鮒仙人（神奈川県川崎市）

044-287-7470

お問い合わせ、ご注文は各取扱店  
または下記HPまでどうぞ

office27  
あとろえぐり

http://www.office27.com

E-mail:info@office27.com

へら鮎釣りの楽しさを追究し続ける...

No.473 May.2005

# へら鮎

Monthly fishing magazine herabuna

# 5

特集 I

## 日研 A O Y、登場。

アソビ・オア・オア・オア

特集 II

もっと「ライン」を知りたい。



管理釣り場割引クーポン券  
さらに12釣り場追加!!



昭和41年5月4日第3種郵便物認可  
第40巻第5号 (毎月1回1日発行)

つれるエサづくり一筋  
**丸マルキュー**

マルキュー自信のダンゴエサ。

# 花より**両**ダンゴ

**4月発売**

**豪快**  
ペレット系。

**寄せる力にあふれた、  
底釣り用ダンゴエサ。**

ペレット系の底釣り用ダンゴエサ。集魚力に優れた特別なペレットを配合し、底のピンポイントにへらを寄せ、食わせませす。ペレット独自の重さでウワズリを抑え、明確なアタリがコンスタントに続くようにサポート。釣り堀、管理釣り場、野釣り場と、あらゆる釣り場で使えます。

**ワンポイント!**  
食い渋ったら、そのままバラケに。

4月に入ったとはいえ、まだ食いが渋い状況もあるはず。そんなときには、下バ리를グルテンなどのくわせエサに代えるといい場合があります。

●ペレ底 330g



**丸マルキュー株式会社**

〒363-8509 埼玉県福川市赤堀2-4

お問い合わせ 本社・桶川工場:048-728-0909 大阪支店:072-824-0909  
四国営業所:0877-44-0909 九州営業所:0942-82-0909  
ホームページアドレス <http://www.marukyu.com/>

釣り場でエサに困ったら  
メール・ホームページ  
<http://www.marukyu.com/fi>

定価 1,000円 本体九五二円

雑誌 07907-05



4910079070551  
00952